

## 第31回農法研究会報告

- (1) 2024年1月10日（水）13:30～、ニッショーホール（旧：ヤクルトホール）にて、産地関係者64産地136名、パルシステム関係者68名の総勢204名参加のもとで第31回農法研究会を開催しました。
- (2) 当日は、小川保代表幹事の挨拶により開会となり、第1部の講演では「地球沸騰化時代における農作物への影響とこれから」をテーマに農研機構農業環境研究部門主任研究員の滝本貴弘様をお招きし①温暖化・気候変動の動向、②2023年夏季高温のまとめ、③地球温暖化のこれから、④高温耐性品種の動向についてお話をいただきました。質疑の時間では、2030年と同規模の高温発生頻度について質問があり、2050年までに温室効果ガス排出量が現在の2倍になる予測モデルでは、今世紀半ばまで高温発生頻度の確率は高まり続け、いずれ常態化する予測があるとお話をいただきました。
- (3) 第2部前半の報告では、米・野菜・果樹・畜産・鶏卵の各専門部会より2023年の気候変動・高温下での現状と取り組みについてのご報告をいただき、全国的に生産品目を問わず気候変動・高温による生産への影響が生じたこと、今後の生産と消費の在り方についての危機感が示されました。
- (4) 第2部後半の報告では、生消協野菜部会とパルシステムで取り組まれている「青果の見える化」の中間報告として、パルシステム連合会産直事業本部第1産直部長の那須豊様、メディカル青果物研究所研究開発室長の服部 玄様をお招きし、旧ジーピーエス時代からの分析の経過と2023年に新たに青果の成分分析を進めた状況についてご報告をいただきました。
- (5) 最後に毛利 嘉宏生産者運営委員長より「農業者は自然が牙を向けることもあれば恵みをもたらすことも実感をしてきました。種をまきつづけてきたからこそ今の農業があります。生消協としても未来を憂いではなく1歩前進していきたい。」と呼びかけられの閉会となりました。

以上



小川代表による開会挨拶の様子



農研機構の滝本様による講演の様子



講演後の質疑にて野菜くらの澤浦代表



専門部会報告をいただいた登壇者の皆様